

調査報告

青海省チベット族自治州の教育 ー奥地の少数民族教育の現在ー

武 小燕（名古屋経営短期大学・子ども学科）

ゴロク州に向かう

「中国全土の30の少数民族自治州のなかで、最も標高が高く気候が悪く環境が厳しく、経済的・社会的発展が遅れていて、一つの民族が占める割合が最も多い。」――これは青海省ゴロク・チベット族自治州（以下、ゴロク州と略す）の政府ホームページに書かれた紹介である。少数民族地域の学校教育の現状を調べるために、2017年9月に筆者はゴロク州を訪ねた。

ゴロク州は北海道よりやや小さく7.6万km²の広さで、住民約19万人のうち92%はチベット族である。平均標高は4,200メートル以上、酸素は地上の60%程度しかない。近くにある雄大な山々のアムネマチン山脈はチベット族の四大聖地の一つであり、その最高峰は6,282メートルほどである。州全域は黄河・揚子江・瀾滄江の源流という三江源自然保護区の一部である。

朝8時ごろ車で青海省省都の西寧から出発し、山を登ったり平坦な高原を走ったりして徐々に高度が上がる。じわじわと頭痛となった高山反応を我慢しながら、道沿いの雄大な風景を眺めていた。夕焼けに染められたような色を呈する丹霞地形、延々と続く山々と大地に押しかけているような雲、のんびりと草を食べている羊やヤクの群れ、点々と現れた遊牧民の鮮やかなテントなど、故郷の中原地域とはまったく異なる景色が続いた。土砂崩れによる道路の一時封鎖解除を待ったこともあり、19時ごろようやく目的地の大武鎮に到着した。大武鎮はゴロク州の州政府とゴロク州マチン県の県政府の所在地であり、平坦な高原地のど真ん中にある。開発を進めている

ためか、建設工事があちらこちらに見られる。大武鎮の面積は 15 km² で人口は 3.3 万人しかない。建物の約半分はさまざまな公的施設と飲食店であり、人々が昔から暮らしを営んでいる町というよりは集合所の印象が強かった。



羊の群れ



ゴロク州の雪山



山に飾られた文字と絵



土砂崩れによる交通制限



大武鎮の一角

陽気な小学校

到着日の翌日は早朝から大武鎮にある民族小学校の A 校に出かけた。A 校は 1959 年に設立された初の公立小学校であり、今複数ある町の小学校のなかで一番の人気校だそうである。学校に入ると、広々としたキャンパスが広がる。東側はきれいに舗装された運動場であり、西側は白を基調とする教室や事務室の入った建物である。建物の天井が高く、廊下の壁に中国の各民族の紹介、青海省やゴロク州の紹介、中国の伝統文化や著名人物の豆知識などの看板が掲げられている。こうした景色は中国の多くの学校でみられるが、ここでは多民族教育と青海出身の人物に関する紹介の内容が特に多い。



A校のキャンパス



教室棟の廊下

教務主任の紹介によれば、2017年9月現在は在校生963人、正規教員42人であり、児童の7割と教員の8割がチベット族である。クラスは計20で、学年ごとに3つまたは4つある。そのなかに全国共通のカリキュラムのみを設ける「普通クラス」とそれにチベット語を加えた「民族クラス」がある。普通クラスには漢民族の子ども、民族クラスにはチベット族の子どもが中心だが、クラスの配属は民族によるのではなく、保護者の希望に応じて振り分けられる。チベット族住民が多いため、民族クラスの数が多く、普通クラスは学年ごとに1つしかない。

筆者の希望とA校の時間割に基づき、A校では朝の会、算数・国語・英語の授業及び授業間の体操の時間を見学させてもらった。中国では小学校から教科担任制であるため、それぞれの担当教員が異なっていた。

朝の会は4年生1組で見学した。この日は月曜日で前日はちょうど教師の日であったため、今日のテーマは「先生への恩返し」であった。担任はチベット族の30代の女性である。「感謝の心をもつことが大事なことだ。私たちは先生に親に活仏に感謝すべきだよ」と先生は言う。恩返しするためにどうしたらよいかについて数名の子どもに発表させた。発言の多くは「ちゃんと勉強して、よい成績で恩返しをする」という内容であった。先生や親の期待に応えてよく勉学し立派な人間になることが期待されている。

数学の授業は5年生のクラスを見学した。担当は漢族の50代の男性である。教室に28名の児童しかおらず、非常に広くて明るい教室である。今日のテーマは小数の掛け算であった。先生は買い物の例を用いて、教室に設置してあるプロジェクターなどのデジタル教具を活用しながら分かりやすく授業を展開した。子どもたちの意欲

も非常に高かった。10年前に故郷の農村を調査した際には、教室の壁に穴が開いているほどぼろぼろな環境だったため、今はこんな奥地の学校でデジタル教具まで整備されて活用されていることに驚きを覚えた。



「先生への恩返し」をテーマとする朝の会 デジタル教具を活かした算数の授業

国語の授業は1年生のクラスを見学した。教室は5年生の教室と変わらない広さだが、子どもがびっしり入っている。数えてみたら73人もいた。なぜこんなに差があるのかと後に聞いたところ、高学年に上がるにつれ、教育の質がより高い都市部への転校が増えるため、児童の人数が減ってしまうそう。一方、ゴロク州のような僻地の教員募集にはなかなか人が集まらないため、クラスを分けようとしても教員が足りなくてできないのだということだった。

このクラスの国語の担当者はチベット族の30代の女性で優秀教員と評価されたベテランの先生である。民族服装を身にまとった彼女は自信にあふれ、凛々しい表情に厳しさが漂っている。人数が多い上に、まだ入学してまもない子どもたちのため、教室はすぐにざわついてしまうが、先生は「お手手はどこに置くかな?」「お口は閉じているかな」と注意しながら、「山という字はね、雪山の山だよ。我々が住んでいるところにたくさんの雪山があるでしょ。」と身近なものを使って子どもたちに興味を持たせようとしていた。

授業見学をした私が、後ろから教室を眺めると、何人かのチベット族の子の独特な髪形が目をつけた。男の子は髪の一部だけを長く伸ばして編み編みヘアにし、女の子はたくさんの細い編み編みヘアで髪の毛をまとめている。隣に座った男の子を可愛く彼の頭をなでようとしたら、彼は急に振り返って警戒したような目線で私をにらんだ。チベット族では年寄りやえらい僧侶を除き、手で人の頭を撫でてはいけない

と後に分かった。

英語の授業は4年生のクラスを見学した。担当はチベット族の30代の女性である。中国では小学校3年生から英語が必修科目である。チベット語の文法は英語と似ていて、チベット族の子どもは英語の授業が得意だそう。授業が始まると、先生はもっぱら英語を話すようになる。彼女は手で教室のいろいろなところを指さして「これは何だ」「それは何だ」と子どもたちに聞く。子どもたちはとても積極的に答えていて、急に教室はにぎやかになった。しばらく練習した後、先生は教科書を出してそこに書かれている表現を子どもに練習させた。先生が用意した紙のサイコロを使ってグループ活動をする。サイコロの各面に英語のフレーズが書かれていて、投げた子が当たった面のフレーズを読んだり質問したりした。授業中は殆ど英語しか使われず、伝わらない時には先生はボディーランゲージや手本で示す。私は英語が苦手な英語の授業には苦しい思い出しかなかったもので、こんなに楽しそうな英語の授業をうらやましく思った。



子どもに質問している国語の授業



サイコロを回す英語の授業

体操の時間は午前中の2限後約30分ある。太陽を浴びて体を動かすために全員が運動場に出てラジオ体操をするが、これは中国の殆どの小中高校にある活動だ。ただ、ここではラジオ体操の次にゴーズァンと呼ばれるチベット族の伝統舞踊を踊る。ゴーズァンの音楽はとても明快でリズム感が強く、子どもたちはそれに合わせて手や足を伸ばしたり体を揺らしたり回したりする。みんなの動きはバラバラだが、とても楽しそうであった。

A校のお昼休みは12～15時の3時間ほどで、一度帰宅して昼ご飯と休憩を取って

からまた登校し、午後17時半ごろ一日が終わる。お昼が近づくと、学校の外で子どもを迎える保護者が大勢集まってきた。民族衣装を着ている人が多く、普段あまり見たことのない服装や飾りを眺めながらこの地域ならではの光景を楽しんだ。一方。首を長くして子どもを待つ親の姿はどこでも一緒だなあと思った。



ゴーズァンを踊る児童たち



正午の迎え

山の奥にある女子校

A校訪問の翌日の早朝、マチン県教育局のユラ氏の同行で運転手と三人で山の奥のB校に向かった。ユラ氏はゴロク州出身のチベット人で、青海の大学を卒業後、ガイド、教員、校長などを経験した後、今教育局で教員研修などを担当している。教育局に異動する前に3年間ほど女子校のB校の校長を務めた。このB校を訪問したのもユラ氏の薦めであった。

大武郷から車で約2時間走ったところに、主要道路の横に「女校」（「女子校」という意味）と書かれている石があり、その隣に山奥に伸びる何らの舗装もされていない山道があった。その山道に入って更に20分走ったら、雄大な山の足元に静かに佇んでいる赤い屋根と白い壁の建物が現れた。あまりにも世間と隔たっているためか、修道院かと錯覚してしまう。なぜここで学校を作ったのかをユラ氏に尋ねてみると、ここは三つの遊牧区が交差する地域で境界争いのトラブルがよくあったため、それを改善するために学校の創設者がわざわざ学校の場所をここにしたという。



山の奥地にある B 校



女子校と書かれている石

B 校は 2005 年にチベット人僧侶のジメジャンザンが創設した小中一貫の全寮制学校である。創設当初、ジメジャンザンは地方政府に働きかけ、入学者数が 5 年以内に 200 人を超えたら公営化するという約束を政府から得た。女子教育にあまり積極的ではないチベット族の居住地であるにもかかわらず、わずか 2 年でその目標を達成した。その背景には教育者出身で、かつ男子校の実績をもつジメジャンザンに対する人々の信頼があるとユラ氏は説明してくれた。2007 年から女子校は教育理念、カリキュラム、場所を変えないという三つの条件で徐々に公立校に移行してきた。

学校の教育理念は「女童の教育は母親の教育になり、母親の教育は人類の教育の根本になる」というものであり、全寮制で貧しい遊牧民の娘を中心に女子教育に力を注いでいる。殆どの在校生が交通不便な遊牧地から来ており、登校や帰宅は時間がかかるため、授業は月曜日から次週の木曜日午前中まで実施し、木曜日午後から日曜日までは休みとなっている。訪問した時点で教員は約 40 名、在校生は小学生の 316 人と中学生の 206 人の計 522 人である。クラスは小学部 9 つ、中学部 4 つ、計 13 ある。在校生も教員も 9 割以上がチベット族である。中国では満 6 歳ないし満 7 歳から入学するが、家庭の事情などにより遅れて入学する子が少なくない。ここの教室にも明らかに年齢の違う子どもたちが席を並べている。



学校に掲示された創設当初の工事の様子



3つの言語で女子教育の理念を示す看板



授業中の子どもたち（小学部）



授業中の子どもたち（中学部）

学校は建設された当初は 1 階建ての長屋であったが、公立校に移行してからは 3、4 階建ての教室や宿舍が立てられるようになり、近代的な教室が整備されつつある。教室にはプロジェクター等の ICT 機器が設置されており、音楽室には数十台のキーボードや太鼓などの楽器のほかに大画面のスクリーンが用意されて小型映画館としても利用できる。本の冊数がまだ少ないが広々とした図書室、また、学生食堂には食器殺菌設備が完備され、手の洗い方やなぜ手洗いが必要かという内容の漫画風の看板が掲げられており、近代的な衛生観念を育てようとしている。これらの設備は民間の寄付によるものも含まれる。

カリキュラムではチベット語は全員必修であるが、国語以外のナショナル・カリキュラムもすべてチベット語で行われる。時間割で一番多くの時間を占める科目がチベット語である。小学生は制服の運動服、中学生は民族衣装が多かった。この子どもたちはとても素朴で人見知りである。ユラ氏は 3 年前にここの校長であったことでユラ氏の教え子がまだ大勢いる。中学生となった彼女たちは放課後、走ってユラ氏

のそばに集まってきた。何をしゃべったらよいか分からないようで、ただただ嬉しそうにユラ氏の顔を見上げたり、頭を下げてユラ氏の話に耳を傾けたりしていた。何人かの子が遠慮がちに少し離れた壁のところに立ってとても懐かしそうな表情でユラ氏を眺めていた。



プロジェクターを使って行う英語の授業



音楽室



手洗い促進のポスター



ユラ氏を囲む教え子たち

昼が近づき、周辺には何もないとのことで私たちは学校の教員食堂で食べることになった。教員食堂は四角の一部屋で、真中に向けて机といすが壁に沿って配置されている。部屋の中央に大きな石炭のコンロがあり、お鍋とやかんを温めている。昼食は隣の厨房で作られた定食である。いただいたトレーには肉と炒め野菜とご飯が山盛りであった。それ以外に、大きなボールに入れた煮込んだヤクの骨付き肉と温かいバター茶が机に用意されている。香りの漂う濃厚なバター茶が格別に美味しかった。ヤクの肉は片手でナイフで削りながら食べるが、私はなかなかうまく切れず、隣のユラ氏が親切に削ってくれた。ヤクの肉は殆ど味付けがされておらず、肉質はやや硬めで少し慣れない食感であった。

ここの教員たちもみんなキャンパスにある教員寮に寄宿している。親からも町からも遠いとのことで、子どもたちの生活上の面倒を見ることも仕事の一つである。特に小学校低学年の子どもたちにとって、彼らは母親代わりや父親代わりのような存在である。自家用車を持っている教員の車は公用車のようで、体調を崩した子どもを町の病院に運んだり、帰省する子どもを町のバス停に送ったりすることがよくある。家庭が貧しくて困っている子に対して、医療費まで代わりに負担することさえある。ある若い女性教員は次のように私に語った。「ここは給料が高いわけでもないし、環境がよいわけでもない。でも、私はここで教えたい。なぜならば、子どもたちの素朴さが私の心をすっかり動かしたからだ。」私は彼女の透き通った瞳を見て深い感動を覚えた。



ユラ氏（左から2番目）とB校の教員たち B校の現任校長（左）、筆者、ユラ氏（右）
（拉加鎮において）

黄河沿岸のチベット語学校

B校から山道に沿って約1時間半走ると、高い山々と黄色い水の大河に囲まれた町が現れた。川が黄河である。黄河は中華文明の母なる河であり、私の故郷も黄河の下流沿岸にあることで、上流にあるこの町に親近感が沸いた。この町は拉加鎮と言い、人口2万人弱の小さな町である。この辺りは砂金が採れることで昔から現地のチベット族以外に他所から人々が集まってきて、チベット人が最多ではあるが、回族、漢民族など、多民族が共存している。



黄河に囲まれている拉加鎮



拉加鎮を流れ通っていく黄河

私たちが向かう拉加鎮のC校は1954年に公立小学校として設置されたが、2006年に中学部が追加されてから小中一貫校になっている。教員は72人の正規を含めて計100人、在校生は1320人前後である。学校には28のクラスがあり、うち小学校は21、中学校は7である。在校生も教員も9割以上はチベット族である。在校生は殆ど拉加鎮または周辺の遊牧地域から通い、9割ほど寄宿舎を利用している。子どもたちが帰宅しやすいように、B校同様に、月曜日から次週の木曜日午前中まで授業し、木曜日午後から日曜日までの二日半は休む。

C校は1990年代にまだ200人余りの小規模な学校であったが、2000年代に入ってから義務教育の普及に伴い、在校生が増えてきた。B校同様に、C校の在校生はチベット族が殆どであり、すべてのクラスでチベット語を学ぶほかに、国語以外のナショナル・カリキュラムもチベット語で行われる。

C校の昼休みはA校と同様で12～15時である。私たちが到着した際はまだ昼休みの時間で、子どもたちがキャンパスの一角でバスケットを練習していたり園庭の廊下で友達とおしゃべりをしていたりしてにぎやかであった。石のテーブルを囲んで宿題をしている子どももいた。暫く経つと、午後の授業時間が近づき、早い足取りで教室に向かう教員が増えた。民族服装の恰好もあればジーンズとジャケットのような恰好もあった。せっかくチベット族自治州に来たのだから、チベット語の授業も一回見学してみたいという思いをユラ氏を通して副校長のサバウ氏に伝えたらすぐ承知してくれた。彼はしばらく通りかかった教員たちを見ていたが、ある20代のチベット族の男性教員を呼び止めた。彼はチベット語を担当する教員であり、ちょうどこれから授業に行く。私は彼に付いていくことになった。



「調和・正直・誠実」との校訓



宿題をやっている子どもたち

入ったのは小学部2年生のクラスであった。授業開始のあいさつ後、約40人余りの子どもが両手を後ろに回したり机の上に置いたりして背筋をびしっと伸ばして座っていた。みんながこの兄のような若い教員を怖がっているようだ。確かに彼の表情は厳しそうだったが、とても真剣に教えていることも伝わってくる。彼はしばらく子どもに向かって何かしゃべってから、教科書を出した。指示された部分の文章を子どもたちに読ませながら、それを板書して、リードしながら子どもたちに繰り返し復唱させた。授業は終始チベット語で私はさっぱり分からなかったが、彼らの表情や動きを観察しながらチベット語の唄のような発音を楽しんだ。ここの教室にも明らかに約二、三歳の年齢差のある子どもたちが混じっている。



チベット語の授業



放課後、先生に何かを尋ねている子どもたち

午後4時ごろ、ユラ氏とサバウ氏が外の大通りに出かけた。そこに別途で来たB校の校長もいた。道路の向こうはゆうゆうと流れる黄河と褐色の山である。みんなは黄河と山を眺めながら、おしゃべりをして何かを待っているようだ。暫く経つと、一台

の大型バスがやってきた。バスは彼らの前で止まって 2 人の中年の男性が降りてきた。彼らはユラ氏たちとあいさつを交わしながら、車内の何人かの若い人を呼んで降りさせた。青海省の師範大学の教員と実習生の学生たちである。学生たちの教育実習が約 4 か月ほどで、教員不足に悩んでいるゴロク州の多くの学校では実習生を大事な戦力として歓迎している。ユラ氏たちはとても嬉しそうに師範大学の教員や学生たちにあいさつし、カターと呼ばれる白いスカーフを渡して歓迎の意を示した。数名の学生はバスの上に積んだ自分の荷物を降ろして、サバウ氏と C 校に入ったり、B 校校長の車に乗ったりして実習先に行った。ほかの学生たちは大武鎮の各学校に配属される予定なので、私たちの車と一緒に大武鎮へ向かった。



筆者と C 校の教員（右側）



師範大学の教員（カターを掛けている 2 人）とユラ氏たち

訪問後

今回の調査では上記の 3 校以外に、チベット僧侶が作った非公式の学校も訪問した。どの学校でも子どもたちの素朴さと教員たちの厳しそうで優しそうな姿が印象深かった。チベット族は先生に対する尊敬の念が強く、「先生は私たちに明るい目をくれた」と言われるそうだ。先生の指導により子どもが善悪を区別し、遠くまで見通す力をもつ人間になるのだという意味である。一方、遊牧民の間ではまだ識字が普及しておらず、どうせ羊やヤクの遊牧をするだけだからと、子どもの教育の必要性を認めない人も少なくないそうだ。近年、義務教育の普及を進める政府の動きと教育熱心なチベット族の知識人の取組みにより、教育に対する認識が少しずつ高まっている。しかし、何のために勉学するのかということについて、保護者、教員、行政には思いの行き違いがあるようだ。立派な人間になることか、進学を目指すことか、それとも

生きる術を身につけるためなのか。

私が訪問した学校では、多くの教員や子どもが民族衣装を着て伝統的装飾を身につけて自分の民族的アイデンティティに誇りをもっているようだった。また、チベット語の学習もチベット文化の継承もカリキュラムや教科外活動を通してなされている。しかし一方、「教育内容にもっとチベット族の文化を取り入れたいが、宗教性が強いとのことでなかなか理解され難い」とユラ氏は悩みを語ってくれた。確かにチベット族の文化はチベット仏教と切っても切れない関係があり、今でもチベット仏教がチベット人の生活や信仰に深く浸透している。それを自治州の公教育のなかでどう扱うべきかは大きな課題である。

もう一つの話はとても印象深かった。それはA校の教員と食事をした際に語られたエピソードである。チベット族の彼女はある日、道端でそこにいたチベット人にバス停の場所をチベット語尋ねた際に、「バス」のチベット語を急に思い出せなくて、その単語だけを中国語でしゃべったら、尋ねられたチベット人から「あなたはチベット族ですか。チベット族なら、ちゃんとチベット語で話さない」と叱られた。すると、民族衣装を身に纏った彼女は「では、あなたはジーンズやシャツを着ていますが、それらも漢民族のものでしょうか。なぜ民族服装を着ないんですか？」と反論した。私はこのエピソードにいくつかの興味深いテーマが潜んでいると考える。一つは、何を民族的シンボルと見なすか。常に民族服装をもって自分の民族的アイデンティティを示す彼女と民族言語をより大事にする道端の人との意見の違いである。もう一つは、ジーンズやシャツの発祥地は西洋なのに、彼女にとってそれは漢民族のシンボルとなっているということである。こうした認識は中国の西南部の少数民族調査を行っている研究者からも聞いたことがある。山奥のマイノリティの人たちでも、社会のマジョリティのほかに、グローバリゼーションからの影響を受けている。私たちの服装や衣食住は世界的にだんだん似てきているが、それは政治や資本がもたらしたグローバル的な同化なのか、それとも人々が自ら選んだ利便性のよりよい社会への進歩なのか。

短い期間の訪問だったが、民族地域特有の課題とほかの地域に共通する教育上の課題をいくつか発見した。調査を受け入れてくれた方々に深く感謝したい。クァワゾン・チェー（チベット語の「ありがとう」）、また再会したい。